

## 『私の熊山遺蹟考』

日本先史古代研究会 会員 若狭哲六(当会会長)

岡山県・東部(吉井川左岸＝東岸)の一角に標高508mの熊山がある。東西南北およそ7kmの広さを持つ山でもある。山頂には、国史跡「熊山遺蹟」がある。標高350m付近には、特に東西南北の山塊一帯から頂上にかけて大小の「石積遺構」の存在を知ることが出来る。中でも頂上付近西寄りの一角に五段(岩盤を含む)から形成されている「石積遺構」がある。この石積遺構は、昭和31年9月27日に国の指定を受けた史跡である。

熊山遺蹟については、以前、沼田頼輔氏(大正14年)と、永山卯三郎氏(昭和5年)に夫々(おのおの)遺蹟についての論旨がなされている。永山氏の論説発表より8年後、この遺蹟は地元の人士によって昭和13年6月13日(雨期)に発掘されていた。発掘より12年間、市井の人には知られなかった遺蹟である。遺蹟は昭和25年京都大学の梅原末治氏によって調査が行われその結果が、昭和28年7月の「吉備考古」第86号で同氏の所見が述べられている。学会での発表は、梅原氏が最初である。同氏は遺蹟より取り出されたとする「三彩」の壺をもって考証に当たっている。次に奈良の天理大学参考館の近江昌司氏が「備前熊山仏教遺蹟考」と題し、昭和50年、「天理大学報」第85輯によって発表している。遺蹟についての考証は、梅原末治氏、近江昌司氏に二人である。

遺蹟は ①経塚説 ②戒壇説 ③仏塔説 ④墳墓説と諸説が分々とされる中、最近では仏塔説が先行されているようだ。熊山遺蹟に付いては、いまだ、その内容を知るものはいない。

私が、熊山遺蹟を知ったのは昭和59年6月である。遺蹟が学識者によって学会に発表されてから32年の後のことである。私の遺蹟についての考察は、幸いにも学識者には全く知らされていなかった遺蹟発掘によって取り出されていた「筒形陶製容器・小壺」の他、多くの遺物を地元の古老に見せてもらってからである。古老は、他に遺物を散逸さすこともなく、また学識者にもみせることもさせず57年間遺物を秘蔵していたのである。古老に会ってから遺蹟に付いての自分の論究は日増しに高まり、遺蹟についての論著を発表することができた。

- 古代国家形成のなぞ-熊山とシルクロード(昭和62年5月)発刊
  - 先史日本の夜明・熊山と東西交流史 (昭和63年4月)発刊
  - 先史日本の夜明・熊山で見つかった「石」と「鋸」(平成元年7月)発刊
  - 先史日本の夜明・世界史的に見た吉備・女王終焉の地熊山 (平成2年4月)発刊
  - 先史日本の夜明・女王国邪馬台の謎に迫る・国指定＝熊山遺蹟・鶴山丸山古墳発掘の真相 (平成3年12月)発刊
- 以上の論著は、国内では国立国会図書館・岡山県立図書館に収納されており、海外では、特に平成3年12月発刊の論著が①米国議会図書館に平成4年8月に収納され②米国シガン大学に平成4年12月に収納され③カナダトロント大学に収納され④米国ハーバード大学に平成6年4月に収納され、⑤中国社会科学院歴史研究所に平成5年3月に収納されている。

中でも特に論著が評価されたのは、「中国社会科学院歴史研究所」の所長李学勤氏であった。李学勤氏は、1993年7月「中国歴史考古誌」に論著に対する所見をよせ、私の論著を広く中国の関係機関に示して下さった。

昭和59年より取り組んできた熊山遺蹟である。すでに26年が経過した。市井の誰もが手がけなかった遺蹟である。今思えばがむしゃらに「目」と「足」と「耳」で捕らえた研究論著である。自説によれば、熊山遺蹟は古代吉備を支配したと考えられる大首長の墳墓と考えられたのである。古代吉備の国は、太古より多くの渡来人にとって形成されていた。

今後は、これまでの自説の論著を見直す中で、新たな視点で遺蹟を捉え、遺蹟構築の意義に迫ってみたいと考えている。日本先史古代研究会の機関誌発行(創刊号)に稿うい寄せた次第である。終わりにあたり「謎の熊山遺蹟」についての若狭(私家説)の研究が遺蹟解明への手掛かりとなれば幸いである。

平成22年6月



謎は誰が解きほぐすのか